

大雨や台風など、自然災害に警戒が必要な時期がやってきました。いざというときに慌でることなく行動できるよう、日頃からの備えについて考えてみましょう。

もしもに**備**える

今年の梅雨から災害発生の危険性が高まった場合に発表される様々な情報について、避難すべきタイミングなど、分かりやすくなるよう、新たに警戒レベル1から警戒レベル5までの5段階に整理されました。

警戒レベル	住民がとるべき行動	発表される情報
警戒レベル5 すでに災害が発生している状況	命を守るための最善の行動をとる	災害発生情報 大雨特別警報 等(相当情報)
警戒レベル4	全員 避難 避難については6ページをご覧ください。	避難勧告・避難指示(緊急) 土砂災害警戒情報 等(相当情報)
警戒レベル3	高齢者 障がい者 乳幼児 などとその支援者は避難、他の住民は準備	避難準備・高齢者等避難開始 大雨・洪水警報 等(相当情報)
警戒レベル2	避難に備え、ハザードマップなどにより、自らの避難行動を確認	洪水注意報・大雨注意報
警戒レベル1	最新の気象情報に注意するなど、災害への心構えを高める	数日中に警報が発表される可能性(早期注意情報)

市が発令

気象庁が発表

※身の危険を感じたときは警戒レベルに関わらず避難してください。 ※常に警戒レベル1から順に発令されるとは限りません。

「警戒レベル3」「警戒レベル4」は、災害が発生する恐れがあるときに発令します。これらが発令された場合は、速やかに行動しましょう。

災害に備える

災害から命を守るためには、普段から災害に関する情報を確認したり、家庭で話し合ったりすることが大切です。

対馬市では、災害が発生する可能性がある場所などをまとめた冊子を配布したり、市内各所に海ばつを示す標識を設置するなどして情報を提供しています。ご自宅近くの危険な場所や避難経路など、普段から確認しておきましょう。



土砂災害の発生する恐れがある危険箇所などを地域ごとにまとめた「ハザードマップ」

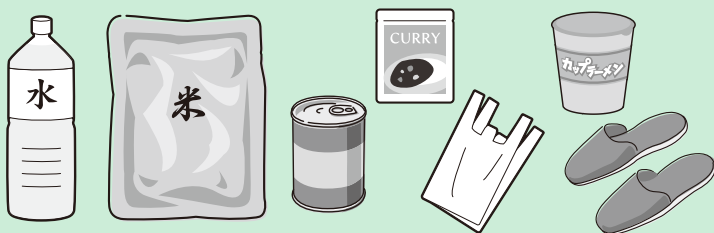


海からの高さを示す標識

ご家庭に備えはありますか？

災害が発生した時の備えとして、最低でも3日分の食料を準備する必要があるとされています。また、ライフラインが停止した時に役立つ乾電池やカセットコンロ、赤ちゃんや高齢者がいる世帯では、おむつやミルク、普段から服用している薬なども準備しておきましょう。

一定の量を備蓄して備える



ライフラインの停止に備える



自分や家族が必要とする物を備える



+

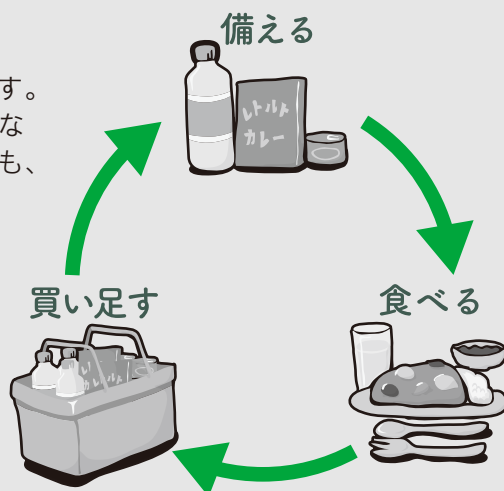
※これらの備蓄品は一例です。自分や家族にとって何が必要なのかしっかり話し合みましょう。

普段の生活が備えにつながります

買い置きしている缶詰やレトルト食品も立派な備蓄品です。“食べたらいっぱい”ことで、普段の生活が災害への備えになります。食品に限らず、乾電池やカセットコンロのガスなども、使ったら買って補充することを習慣付けましょう。




食べたら（使ったら）買い足すことを習慣付け、普段の生活の中で無理なく備えましょう。



災害から 命を守る

避難行動とは

地震・津波・土砂災害・高潮など数分から数時間後に起こるかもしれない様々な自然災害から「命を守るための行動」のことです。いつ、どのような避難行動を取ればよいのかは、家族構成、自宅の立地、身体や気象の状況等により異なります。

立ち退き避難  避難所への移動  安全な場所への移動 (親戚や友人の家など)		屋内安全確保  近隣の高い建物などへの移動  建物内の安全な場所での退避(2階など)
--	--	--

避難行動をする際は

- ・発表される情報を確認し、より安全な場所へ身を置くことを考えましょう。
- ・食料や衣類、薬など、自分で使う物、無いと困る物は忘れずに持って行きましょう。
- ・暗くなる前や天候が悪化する前に避難を完了しましょう。

地域で取り組む「安心・安全」

平成7年の阪神・淡路大震災では、発災直後の救助や、その後の避難所運営に、地域住民による助け合いやボランティア活動が大きな役割を果たしました。その教訓を活かし、災害に備える組織づくりが全国で進んでいます。昨年4月には、庵原町棧原地区で、地区や民生委員、地域マネージャーらが協力して自主防災組織「防災さじきばら」が発足しました。



みんなで支え合う地域を目指して



防災さじきばら
柴田 孝文 会長

棧原地区では、数年前、地区内で孤独死という不幸な出来事が発生したことをきっかけに、高齢者の見守り活動を始めました。地区内には、一人暮らしの高齢者や、寝たきりの家族を抱える人など支援が必要な人たちがいて、もし災害が起こったらどうしたらよいのかという思いがありました。

そこで、もしもの時に備える仕組みを作ろうと、自主防災組織を作りました。

地区を管轄する民生委員や行政と連携し、災害時に支援が必要な世帯を共有し、避難情報が発令された際には、避難所に避難する体制を整えています。

また、避難所の運営に備えて、食料や簡易ベッドなどの備蓄品を購入して、もしもの時に備えています。災害時「自分の身は自分で守る」ことには限界があります。日頃から地域が連携して「みんなの身をみんなで守る」ことも大事だと考えています。



地区の避難所にも非常食や水を備蓄



定期的集まって役員で地区の情報を共有



ベッドの寝心地を確かめるために試しにみんなで泊ってみようと思っています！と話す柴田会長

自主防災組織とは？

自分たちの地域は自分たちで守ることを目的に、自主防災活動に取り組む組織のことです。日頃から地区内の安全点検や住民の見守りなど、災害の発生に備えた活動を行うことで、いざという時に住民や地域の事情を熟知して適切な避難や、きめ細かな避難所運営につながる事が期待できます。

※組織の新規結成や活動には、市の補助などの支援があります。(問)地域安全防災室 ☎0920(53)6111

子どもたちも考えています

教育の場でも防災についての学習が行われています。昨年、大船越中学校（美津島町）では、社会科の学習の一環として、学校が避難所になった場合にどのように運営すればよいかを考える授業を行いました。



避難者が快適に過ごせる配置は？



1畳分の広さってこのくらい？

授業では、避難所運営ゲームを使って、中学校の体育館に避難所を開設する際のシミュレーションを行いました。

避難所運営ゲームとは、避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。

体験した生徒たちの声

- 同じ避難者でも「移動しやすい入り口が良い」「人の出入りが騒がしいから奥が良い」など、人によって考え方に違いがある。
- 決められている収容人数463人に対応すれば、一人当たり1畳分のスペースしかないこと、通路の位置や広さなども考える必要がある。
- もしもの時は、今回の経験を生かしてみんなで助け合いたい。



今回の経験をもとに作られたてびきと体育館での避難所設営図



学校全体で備えていきたい

この取り組みをきっかけに中学校では、避難所運営のてびきを作成しました。避難される方の受け入れ方法から、トイレの利用や掃除の方法、カウンセリングなど、避難所運営が必要と考えたことをまとめ、もしもの時に備えています。昨年は、社会科の授業として行いましたが、これからは学校全体の取り組みとして、生徒と職員、そして地域の皆さんと一緒に学び、備えていきたいです。

全国で発生している大規模な災害で、学校が避難所として運営されるケースが多くありますが、災害の時、避難場所としてただ開放するだけではないと感じています。しかし、避難所を運営するということについて、生徒はもちろん職員もよく理解していません。運営について少しでも知識があれば、もしもの時に備えることができます。地域の中で拠点として位置する学校という場所だからこそ、そこで生活する私たちが備えることが大切だと思います。



大船越中学校

東岡 貢 校長

「日常」を維持するために備える

大雨や地震などの大規模災害は、毎年のように各地で発生し、大きな爪痕を残しています。ひとたび大規模災害が発生すれば、避難生活は長期にわたることもあり、身体や心に大きな負担となります。避難生活でのストレスは「災害関連死」の原因の一つともされ、災害発生後の過ごし方にも注意が必要です。

災害は、生活を非日常の世界に一変させます。しかし、日頃から災害に備えて準備を行っていれば、少しでも日常の生活に近づけることができます。

そのためには、自らがしっかりと準備を行うことや、周囲の人たちがお互いに支え合う関係づくりが大切です。いつ来てもおかしくない「その日」に備えて、自分や家族を守るための準備を始めましょう。